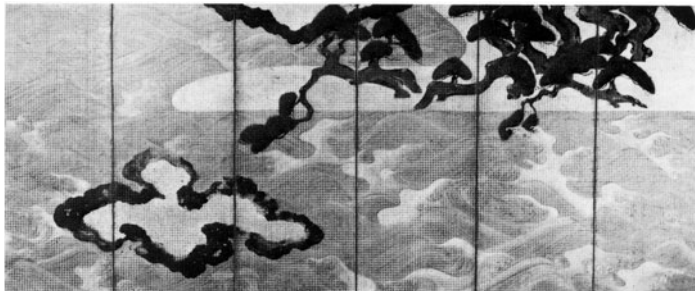
〔歎美抄展によせて〕

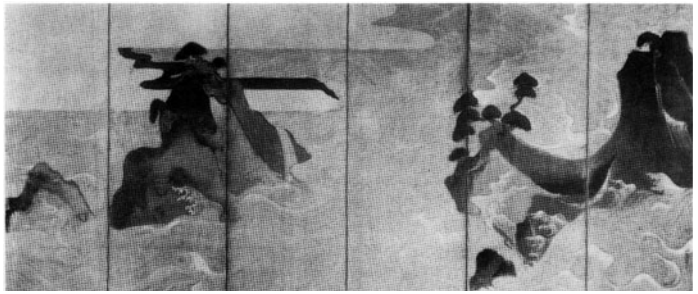
原三溪と矢代幸雄

大和文華館は昭和35年10月31日、第一回展「開館記念名品展」の開会式をもって開館しました。祝辞を述べた大英博物館東洋部長、バージル・グレイ氏をはじめ、海外からも40名を越える賓客があり、大和文華館の開館がいかに国際的な注目を集めていたかがわかります。この展観には、絵画、書籍、陶磁、漆工などの幅広い分野から、国宝４件、重要文化財20件を含む58点が展示されました。これらは大和文華館が財団法人として設立された昭和21年以降に蒐集された作品です。作品蒐集をはじめ美術館の理念や建築など、美術館構想の一切を託されたのは、初代館長、矢代幸雄です。その後も、作品の蒐集は継続されますが、現在においても第一回展の展示作品は所蔵作品の中核をなしています。バージル・グレイ氏は祝辞において、展示室と周囲の自然環境の融和をはかった美術館建築とともに、「矢代さんが今まであまり注意を払われなかった中国の陶器や漆器と云う分野にまで、矢代さんは優れた名品を集められた」と述べ、優れた審美眼と理想の美術館像にもとづいた、個人の嗜好に偏らない蒐集方針への敬意を表されています（衛藤駿「大和文華館の開館」大和文華34号）。大和文華館の所蔵作品は、特定の分野に集中しないように蒐集されましたが、特別な意識をもって蒐集された分野もあります。第一回展では、日本の美術作品が37点、中国の美術作品が21点展示されています。中国では絵画が南宋時代の４点に対して、日本では20点を展示し、そのなかに、宗達筆「伊勢物語図色紙」、光琳筆「扇面貼交手筥」、「中村内蔵助像」、乾山筆「武蔵野隅田川図乱箱」、「春柳図」の５点の琳派作品があります。絵画以外の作品、光悦作「沃懸地青貝金貝蒔絵群鹿文笛筒」、乾山作「色絵夕顔文茶碗」、「銹絵柳文重香合」を合わせれば、全58点中８点を数え、琳派作品が重視されていたことは明らかです。これらのうち、いずれも重要文化財に指定されている光琳筆「扇面貼交手筥」、乾山筆「武蔵野隅田川図乱箱」、光悦作「沃懸地青貝金貝蒔絵群鹿文笛筒」の３点は原富太郎氏の旧蔵作品でした。この３点を加えれば、大和文華館には、国宝２点、重要文化財13点を含む19点の原家の旧蔵作品が所蔵されています。

矢代幸雄は東大英文科に入学し、西洋美術史の研究を志します。実際に絵画も学んでおり、第７回文展に水彩画「草原の赤い傘」が入選しています。原富太郎との出会いは、大学卒業後、東京美術学校に職を得ていた大正５年です。インドの詩人、タゴールが横山大観の紹介で、インドの詩人、タゴールが横浜の原家に滞在することになり、矢代は通訳を依頼されました。原富太郎は生糸貿易で財をなした実業家であり、三溪と号した東洋美術の蒐集家として知られていました。矢代は原三溪との出会いを『私の美術遍歴』（昭和47年、岩波書店）の中で、「私のその後の生涯を通じての美術遍歴にとって、もっとも継続的なる大きい感化、影響を受けた重要事項として、これを機会に私が三溪先生にしられたことがあった。」と記しています。三溪は作品を自らの鑑識によって蒐集し、新進作家たちを奨励するために公開していました。原家には、作家だけではなく大和絵に造詣の深い田中親美、『古寺巡礼』の著作で知られる哲学者、和辻哲郎が親しく出入していました。矢代が知遇を得た頃には、上野直昭、児島喜久雄、中川忠順をはじめ、国宝調査室に勤務する田中豊蔵、福井利吉郎、脇本楽之軒らの美術史研究者が加わり、横浜の原家、すなわち、三溪園は作家や学者、愛好家が作品をめぐって意見を交わす研鑽の場となっていました。20代後半の若き矢代は三溪の薫陶を受け、東洋美術への目を開かれたとともに、鑑賞体験による芸術批評にもとづく美術史研究について、大きな示唆を得たといえます。大正10年に矢代は、念願の欧州留学を果たし、イタリア美術研究の大家であったバーナード・ベレンソンのもとで４年間をボティチェリ研究に没頭します。その時の心境は、同書において、「美術史的のことはベレンソン先生の指導を受け、あとは画そのものを自分の眼をもってよく見て、自分の心でよく判断して、そして自分としての研究をするつもりであった。」と記しており、作品研究において鑑賞体験を尊重する姿勢を貫いています。この研究成果は大正14年にロンドンで出版された英文の『サンドロ・ボティチェリ』として結実します。関東大震災で父を亡くし、この年に帰国しますが、欧州での留学は、西洋美術史研究者としての国際的な高い評価だけではなく、東洋美術の芸術性を西洋美術と比較して判断する広い視野と、欧州の美術館や研究所に比べ、日本の制度や施設がいかに不十分であるかという問題意識を矢代に与えました。この留学経験は、後に創立を託された美術研究所（現・東京文化財研究所）と大和文華館の構想に活かされます。大和文華館の開館当時、明治23年に生まれた矢代は既に70才でした。大和文華館の開館は、豊かな経験が活かされた晩年の最も大きな仕事と言えます。（中部義隆）（「松島図屏風」の挿図は山根有三編『琳派絵画全集　宗達派１』日本経済新聞社　昭和54年刊から複写させていただきました。）

松島図屏風（フリーア美術館蔵）





季刊 美のたより №150
平成17年４月１日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.